



## ■■■ショートコメント■■■

◆ヒュー・グラントと聞けば、ハンサムな2枚目のおじさん俳優をイメージするが、彼の無名時代の20代での出演作がコレ。ジェームズ・アイボリー監督が1987年に製作した文芸ロマンの名作『モーリス』が4Kで蘇ったが、そのテーマは何と男同士の同性愛。今でこそLGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー）は市民権を獲得し、大阪の男同士の弁護士カップルも堂々とそのアツアツぶりを公表しているが、20世紀初頭のイギリスでは・・・？

◆本作冒頭では、ケンブリッジ大学のキングス・カレッジの寮生であるモーリス・ホール（ジェームズ・ウィルビー）が、同期生で優等生のリズリー（マーク・タンディ）や、クライブ・ダーラム（ヒュー・グラント）らとクソ難しい“哲学論争”を交わす風景が描かれる。これが1909年当時のイギリス貴族の息子たちの大学生活だから、何とも優雅なものだ。その哲学論争の内容はよくわからないが、そこでモーリスとクライブが怪しげな雰囲気になっていくから、アレレ・・・。

その後、クライブの別荘に招かれたモーリスは、ダーラム家の家族たちとも交流を深めるが、同時にクライブとの仲は更に親密に・・・もともと、1987年製作の本作は男同士の性愛をスクリーン上に直接見せることはないから一安心(?)だが、いくらご両人がハンサムでも、私にはいささかグロテスク・・・？

◆本作を観ていると、イギリスがいかに身分社会の国で、貴族がいかに偉そうにしていたかがよくわかる。教師と対立してケンブリッジ大学を中退してしまったモーリスは今、金融業界(=株屋)に勤め、それなりに活躍中。他方、クライブは弁護士になり、その後は政界に進出していたから、これまた立派なものだ。

本作中盤はそんな2人の隠れた愛の姿を描くが、ある日リズリーの同性愛が発覚し逮捕されてしまったから大変。当時のイギリスでは同性愛は重罪とされていたわけだ。しかし

て、クライブは母から勧められた女性とスナリ結婚に至ったが、さてモーリスは・・・？

◆本作は2時間21分と1987年当時の映画としては長尺で、中盤以降私は少し飽きてきた。すると、本作終盤には新たにダーラム家の別荘で猟番の若者アレック・スカダー（ルパート・グレイブス）が登場し、モーリスとの間で何やら怪しげなシグナルを！そして、まさかと思っていると、ロミオとジュリエットのバルコニーのシーンもどき（？）のシーケンスが展開されるから、ビックリ！もちろん、ここでも今風のAVビデオのようなシーンはもちろん、2人の直接の性愛シーンは登場しないが、私には裸（同然？）の2人がベッドの中で抱き合っている風景だけでゲンナリ・・・。

◆本作中盤ではモーリスとクライブとの痴話ゲンカ（？）のシーンが、終盤ではモーリスとアレックとの痴話ゲンカ（？）のシーンが登場するので、いずれもその論点や結論の導き方に注目！モーリスとクライブは2人ともケンブリッジ大学の中退生と卒業生だけあって論理的だが、アレックは猟番だけに非論理的でいささか感情的になる傾向が強い。モーリスも当初はそんなアレックからの理不尽な脅迫等を恐れていたが、アレックが家族と共にアルゼンチンに移住するという決心を聞くと一安心。そして、それを聞いたモーリスの決断とは・・・？

◆本作はモーリスとクライブという2人の主役はもちろん、他の若者も全員ハンサムな顔立ちをしているし、ストーリー展開も全く読めないのが、途中で誰が誰やらわからなくなる時がある。また、本作のラストからクライマックスに向けたストーリー展開でも、アルゼンチンに向かう船にアレックが現れてこないため、こりゃひょっとしてモーリスが・・・？ そんな『太陽がいっぱい』（60年）のようなミステリー的展開も考えてしまったが、いやいや、さにあらず。しかして、本作の結末は如何に？なるほど、なるほど・・・。

2018（平成30）年6月15日記